イスラーム世界研究　第16巻（2023年3月）168–186頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 16 (March 2023), pp. 168–186

ムガル帝国におけるイブン・アラビー学派に関する先行研究レビュー
――イラーハーバーディーに関する研究動向と今後の課題――

森口　遥平*

A Survey of Previous Studies
on Muḥibb Allāh Allāhābādī (Ilāhābādī)'s Life and Works

MORIGUCHI Yohei

Muḥibb Allāh Allāhābādī (Ilāhābādī) (d. 1648) was a prominent Chistī-Ṣābirī Sufi in Mughal Empire in the 16th and 17th centuries. Though Ilāhābādī wrote prolific works about *waḥda al-wujūd* (Oneness of Being) and was regarded as "*Ibn 'Arabī al-Thānī* (the second Ibn 'Arabī)," his mystical thought has not been studied so much, because of the excessive attention in 20th century to his contemporary, "*Mujaddid-i Alf-i Thānī* (the reviver of the second millenium)" or Aḥmad Sirhindī (d. 1624). This paper aims to examine previous studies on Ilāhābādī's life and works, especially his most controversial treatise "*al-Taswiya* (the Equivalence)," and asserts the importance of the future study of his mystical thought.

1. はじめに――目的と問題の所在――

本論文は、16–17世紀南アジアを代表するスーフィーであるムヒッブッラー・イラーハーバーディー（Muḥibb Allāh Mubāriz Ilāhābādī,[1] d. 1648）に関する先行研究を概観するとともに、今後の研究課題を提示することを目的としている。

I-1. イラーハーバーディー研究の意義

イブン・アラビー学派[2]がその誕生から現代に至るまで、インド亜大陸のイスラーム神秘思想家たちにどのような影響を与え、また現地においてどのように発達してきたかについては、［Chittick 1992］や［Rizvi 1983a; 1983b］などの概説的な先行研究があるにも関わらず、インド亜大陸で活動したスーフィーたちの著作内容を分析して、イブン・アラビー学派における用語や理論による影響といった点まで踏み込んで論じた研究はまだ十分なされていない。

特に、16–17世紀南アジアに存在したムガル帝国において活躍した、チシュティー教団サービリー派スーフィーであるイラーハーバーディーの研究は、現在までほとんどなされていない。本論文の末尾に掲載している2022年7月現在までになされた先行研究の数においても、例えば同時代の代表的なスーフィーであるスィルヒンディー（Aḥmad Sirhindī, d. 1624）の先行研究数と比べると

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）本稿における転写法は、原則として『岩波イスラーム辞典』にしたがう。なお、筆者の判断に基づき、転写表記を適宜改めた箇所がある。

2）12世紀スペイン・アンダルス地方生まれのイスラーム神秘思想家であるイブン・アラビー（Ibn 'Arabī, d. 1240）の主著『叡智の台座（*Fuṣūṣ al-Ḥikam*）』、『マッカ啓示（*al-Futūḥāt al-Makkīya*）』で展開された思想に基づく「存在一性論（waḥda al-wujūd）」や「完全人間論（insān al-kāmil）」といった学説に追従し、それらの発展に貢献した人々を広く「イブン・アラビー学派」と呼ぶ。なお、いかなる人物をイブン・アラビー学派に含めるかについて、統一的な見解はいまだに確立されていないが、例えばチティックは、1）クーナウィー（Ṣadr al-Dīn al-Qūnawī d. 1274）とそのサークル、2）イブン・アラビーの主著『叡智の台座』の注釈者たち、3）スィルスィラ（系譜）でアラビーに連なる人たち、4）知的に影響を受けた人たち、の4分類を提唱している［Chittick 1991］。

圧倒的に少ないと言える。

しかし、イラーハーバーディーは、下記2点において、同時代における極めて重要なイブン・アラビー学派の一人であるといえる。まず、南アジアにおけるイブン・アラビー学派に属するスーフィーは、存在一性論の思想的影響が見られる14世紀からすでに、イブン・アラビーの著作そのものではなく、彼の孫弟子であるファルガーニー（Sa‘īd al-Dīn al-Farghānī d. 1300/1）やジャーミー（‘Abd al-Raḥmān al-Jāmī d. 1492）の著作から影響を受けている場合が多かったことが指摘されているのに対し［Chittick 1992: 221］、イラーハーバーディーは、そのような南アジアにおいては例外的に、イブン・アラビーの『叡智の台座』や『マッカ啓示』を直接参照しており、それぞれに注釈を付している［Rizvi 1983b: 17; Chittick 1992: 233］。そして、このことから後世において「第二のイブン・アラビー（Ibn ‘Arabī al-Thānī）」ないしは「偉大な師（Shaykh-i Kabīr）[3]」と呼ばれていた［Ali 1973: 250–251］。

次に、イラーハーバーディーは同時代における存在一性論学派の重要人物および反・存在一性論学派の人びとと積極的な議論をおこなっている。前者に対しては、例えば、ムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーンの皇太子であるダーラー・シュコー（Dārā Shikūh d. 1659）との存在一性論についての問答が記録されている［Rizvi 1983b: 139–142］。そして、後者に対しては、存在一性論への異論として「目証一性論（waḥda al-shuhūd）」を唱えたスィムナーニー（‘Alā’ al-Dawla al-Simnānī, d. 1336）やギースーディーラーズ（Khwāja Banda Nawāz Gīsūdirāz, d. 1422）をその著作のなかで批判するとともに、同時代の著名な哲学者ムッラー・マフムード・ジャウンプーリー（Mullā Maḥmūd Jawnpūrī, d. 1652）と書簡をやり取りし、そのなかで存在一性論を擁護している［Rizvi 1983b: 269］。

よって、イラーハーバーディーが展開したイスラーム神秘思想の解明は、南アジアでのイブン・アラビー学派の発展を個別の事例から明らかにするものであるとともに、16–17世紀のムガル帝国におけるイブン・アラビー学派をめぐる論争の詳細の解明に貢献するものであると言える。そして、本稿は、イラーハーバーディー研究に本格的に取り組むための基礎として位置づけられるものを目指す。

I-2. 本稿の構成

続く第2章では、イラーハーバーディー研究の背景知識として、ムガル帝国におけるイブン・アラビー学派について描写する。第3章では、イラーハーバーディーの生涯と著作について概観し、第4章では、イラーハーバーディーの主著『付与と受容[4]の間の等価（*al-Taswiya bayna al-Ifāda wa-l-Qabūl*）』についての先行研究を紹介する。そして最後に、第5章において、先行研究を踏まえて、今後の研究課題に言及したい。なお、本稿の末尾に、イラーハーバーディーについての先行研究一覧を掲載する。

II. ムガル帝国におけるイブン・アラビー学派

II-1. ムガル帝国について

イラーハーバーディーの生涯を説明するまえに、背景知識として、彼が生きたムガル帝国および

3）この呼称は、イブン・アラビーが「最も偉大な師（al-Shaykh al-Akbar）」と呼ばれていたことを反映したものであると考えられる。

4）本稿で後述する新プラトン主義者を経由したイラーハーバーディーへの影響関係については更なる研究が求められるが、プラトンの著作『ティマイオス』において「受容者」という語がイデアを受容する存在として用いられており、その記述において、あるものがそのあり方に関わる何かを高次の存在から受容する（すなわち付与される）という構図も類似している［中畑 2007: 479–481］。

同帝国と南アジアのスーフィー教団との関係について、簡単に言及したい。ムガル帝国は、中央アジアのティムール朝の系統を継ぐバーブルによって創始され、1526年から1858年にかけて、南アジアに存在した帝国である。イスラーム研究の観点から見た同帝国の特徴としては、イスラーム王朝でありながらも、その治世の一時期において、積極的な宗教融和政策がおこなわれたことが挙げられる。例えば、第3代皇帝アクバルは非ムスリムへの人頭税を廃止したり、イスラームとヒンドゥー教のアマルガムともいえる新宗教「ディーネ・イラーヒー」を実施したりしている。加えて、第5代皇帝シャー・ジャハーンの皇太子ダーラー・シュコーはカーディリー教団に所属しつつ、ヒンドゥー教の諸概念をスーフィズムの用語で説明した著作『二つの海の交わる所（*Majma' al-baḥrayn*）』を執筆したり、ウパニシャッドをペルシア語に翻訳する事業を実施したりしていた［Rizvi 1983b: 129, 417, 423］。また、同帝国とスーフィズムとの関係について言えば、第4代皇帝ジャハーンギールはカーディリー教団やチシュティー教団を優遇し、スーフィー側もムガル帝国の皇帝をイスラームの聖人と見なすなど、互いに概ね良好な関係を築いたとされる[5]［Alam 2011: 148, 149］。

II-2. ムガル帝国におけるイブン・アラビー学派に関する先行研究

南アジアのスーフィズムおよびイブン・アラビー学派を研究する場合、まず参照するべきは、［Rizvi 1983a; 1983b］ならびに［Chittick 1992］であろう。前者2点は、インド亜大陸において活動したスーフィー教団ごとに章立てして、各教団の来歴やそのなかで重要なスーフィーについて解説している。そして、後者は、14世紀から19世紀までのインド亜大陸で活躍したイブン・アラビー学派の人物およびその著作を網羅的に掲載するとともに、その内容がどの程度イブン・アラビー学派に関連するかによって、それぞれの著作をランク付けしている[6]。また、本論文で取り上げるイラーハーバーディーも所属したチシュティー教団については、［Ernst & Lawrence 2002］が、インドにおけるチシュティー教団の宗教実践やシャイフ、聖者廟について、それぞれ章立てして解説している。彼らの本文において15世紀から19世紀のシャイフの説明がないことは難点だが、巻末にはチシュティー教団に関する西欧語の参考文献一覧が掲載されており、そこではイラーハーバーディーをはじめ、本論文にも登場するアブドゥッラフマーン・チシュティー（'Abd al-Raḥmān Chishtī, d.1683）など、ムガル帝国期に活躍したスーフィーについての文献が挙げられている。加えて、サービリー派については、［Nizami 2017］が同派の概説および主に18, 19世紀のインド北部における活動について説明しており、同書でイラーハーバーディーにも言及している。

特に、ムガル帝国におけるスーフィズムおよびイブン・アラビー学派については、下記に挙げるものが参考になると思われる。まず、全体的なスーフィズムについて述べたい。［Schimmel 1980］はその第3章において、バーブルからアウラングゼーブまでのムガル帝国皇帝（およびその近親者）の人物史を描写しつつ、その皇帝と関わりがあった、もしくはその統治下において活躍したスーフィーたちの来歴や著作について概説している。また、［Alam 2011］は、ムガル帝国期の政治権力者とイスラーム法学との親和／敵対関係をめぐるチシュティー教団とナクシュバンディー教団の考えを説明している。

次に、ムガル帝国におけるイブン・アラビー学派についての先行研究を紹介したい。代表的なも

5）ただし、スーフィズムへの支援一辺倒ではなかったことは述べておく必要がある。例えば、第5代皇帝シャー・ジャハーンは先に名を挙げた哲学者ムッラー・マフムード・ジャウンプーリーを後援していた［Rizvi 1983b: 7］。

6）しかし、同論文において言及されているのは、アラビア語、ペルシア語で記された著作のみである［Chittick 1992: 218］。

のとしては、先に紹介した［Chittick 1992］に加えて、［Chittick 2012］が挙げられる。後者においてチティックは、waḥda al-wujūd という語句がイブン・アラビーの死後にその思想的立場を指すテクニカルタームとして確立されたことを指摘し、その際に wujūd という言葉が本来持っていた「見いだされる shuhūd」という語義が把握されにくくなったことを述べる。続いてチティックは、スィルヒンディーは wujūd という言葉の一つの意味に固執し、もう一つの意味を無視したために、waḥda al-shuhūd の優位を主張したことを確認する。ただしその後、wujūd の本来の語義を把握していた同時代のスーフィーからしてみれば、スィルヒンディーが説いたことはイブン・アラビーの考えを焼き増ししたにすぎず、そのため、当時においてわざわざスィルヒンディーに対して反論しているスーフィーがほぼいないことが指摘される[7]。そして最終的に、それでもなおスィルヒンディーが 16–17 世紀インドにおける重要な思想家であるように研究家たちに扱われていたのは、本稿で後述するように、20 世紀南アジアにおけるナショナリズムに基づいた思惑が背景にあった、とチティックは結論付ける［Chittick 2012: 39］。

III. イラーハーバーディーの生涯と著作

III-1. イラーハーバーディーの生涯

イラーハーバーディーの生涯については、彼自身の著作『選良たちの息吹（*Anfās al-Khawāṣṣ*）』および『選良たちの中の選良の眺め（*Manāẓir-i Akhaṣṣ al-Khawāṣṣ*）』で述べられている。本節では［Ali 1973; Ansari 2006; Jafari 2009; Lipton 2009b; Nair 2017］を参照しつつ、その生涯を時系列で説明する。なお、イラーハーバーディーの生涯と同時代におけるイスラーム思想史上の出来事ならびに南アジアでの歴史的な出来事については、下記の図 1 を参照されたい。

＜イラーハーバーディーの生涯＞		＜イスラーム思想史の出来事＞		＜南アジアでの出来事＞	
				1556年	ムガル帝国第 3 代皇帝アクバル即位
		1565年	シャアラーニー、没する	1564年	アクバル、人頭税を廃止
996/1587年	アッラーハーバード近郊に生まれる	16世紀後半	スィルヒンディー、『ラーフィズィー派批判の書』などを執筆		
17世紀初頭	サービリー派のタリーカに属して、スーフィーとしての修業を本格的に開始	1624年	スィルヒンディー、没する	1602年 1604年頃	オランダ東インド会社設立 シク教聖典『グランド・サーヒブ』編纂
1628年	アッラーハードに戻り、執筆活動や弟子の指導を始める	1628年	ムッラー・サドラー、『知性の4つの旅に関する超越的哲学』完成	1628年	第 5 代皇帝シャー・ジャハーン即位
1630年代？	『等価』の執筆	1631年	イスマーイール・アンカラヴィー、ミール・ダーマード没する	1632年頃	タージ・マハル、着工
1640年頃	『等価』の注釈書執筆			1640年	イギリス、マドラス建設開始
1648年	アッラーハーバードに没する	17世紀半ば	ダーラー・シコー、ウパニシャッド文献の翻訳。自身も主著『二つの海の交わる所』執筆（1654/55 年完成）	1649年 1657年	ヴィジャヤナガル王国、事実上滅亡 ムガル帝国皇位継承戦争開始

＜図 1　イラーハーバーディーの生涯・イスラーム思想史・南アジア史対照表＞

（※大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002; 小杉泰他編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会 , 2008; 東長靖他編『イブン・アラビー学派文献目録』京都大学イスラーム地域研究センター, 2010; 辛島昇他編『［新版］南アジアを知る事典』平凡社, 2012; *Encyclopedia of Islam* 2nd Edition, Brill, 1993 をもとに筆者作成）

7）この際にチティックはインドで実施したムガル帝国期のスーフィー文献調査において、スィルヒンディーがほとんど言及されてないことを自身の主張に援用している［Chittick 2012: 37］。

＜図２　アッラーハーバードの位置＞（筆者作成）

イラーハーバーディーは1587年にアッラーハーバード[8]郊外のサドルプールにて誕生した。父はシャイフ・ファリードゥッディーン・ガンジェ・シャカル（Shaykh Farīd al-Dīn Ganj-i Shakar d.1236）の子孫であり、母はハルガム家のカーズィー・イスマーイール（Qāḍī Ismāʻīl）の娘であった[9]。そして、イラーハーバーディーの血統は遡れば第２代正統カリフであるウマルにつながるとされている［Ali 1973: 243］。

彼の神秘修行の遍歴として、最初に来るのは、サドルプールでのイスラーム初等教育である。彼はサドルプールにて、スーフィーから伝統的イスラーム諸学を学ぶ傍ら、サマーウなどの基本的な神秘主義技法を学んだとされる［Jafari 2009; 193］。その後、彼が20代のときに、彼の父が亡くなり、それまで父が担っていた役割を継ぐことになって、学習を一時的に中断することになるも

8）インド北部の古くからの城塞都市。ムガル朝第３代皇帝アクバルによって、再興された。アッラーハーバードの位置については、上記図２を参照されたい。なお、2018年に都市名がPrayagrajに変更となっている。

9）よって、イラーハーバーディーの母方のいとこに、ムガル朝第６代皇帝アウラングゼーブの家庭教師ハルガムのカーズィー・アブル・ワイズ（Qāḍī ʻAbd al-Wāʻiẕ）がいたことになる。イラーハーバーディーとムガル帝国皇帝一族との交流は、イラーハーバーディーの思想・知名度に加えて、この血縁関係も要因のひとつであったと推察される。

のの、その後いとことともにラホールに赴き、シャー・アブドゥッサラーム・ラーホーリー（Shāh ‘Abd al-Salām Lāhorī, d. 1627）のもとでイスラーム諸学を修めたとされる［Jafari 2009: 193］。

その修学後、彼は故郷に戻り、イスラーム諸学を教えていたが、当時ムガル帝国の宰相を務めていたナワーブ・サードゥッラー・ハーン（Nawāb Sa‘ād Allāh Khān）と再会したことにより、ムガル帝国第4代皇帝シャー・ジャハーンから宮廷大臣に任命されたといわれる［Jafari 2009: 194］[10]。こうして彼は宮中に召し抱えられたのち、宮廷人の慣習としてデリーにあるクトゥブッディーン・バフティヤール・カーキー（Khwājā Quṭb al-Dīn Bakhtiyār Kākī, d. 1235）の聖者廟を訪問した際、世事を捨てて神秘主義に励むことを促す幻聴を聞いたことにより、そのまま出奔して、サハーランプルにおいて、チシュティー教団サービリー派のシャイフであるアブー・サイード・チシュティー・サービル・ガンゴーヒー[11]（Abū Sa‘īd Chishtī Ṣābir Gangohī, d.1639/40）のもとで修行を始めたとされる。また、この時代に彼の存在一性論への関心が高められたとの見解がある［Jafari 2009: 194］[12]。

そして、アブー・サイード・チシュティー・サービル・ガンゴーヒーのタリーカで修行を終えたイラーハーバーディーは、アッラーハーバードに帰る途中、ルーダウリーにて、同時代の重要なイブン・アラビー学派のひとりであるシャイフ・アブドゥッラフーマン・チシュティーと知り合い、ともに同地の聖者廟を参詣してまわったとされている。

こうして、イラーハーバーディーは1628年からアッラーハーバードにて、スーフィーとしての著述や教導の活動をおこなうようになり、後述の著作群を執筆する傍ら、彼の息子をはじめとして、同時代の宮廷人や数学者など多方面で活躍する多くの弟子を育てることになる[13]。また、このアッラーハーバードでの活動の最中に、ムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーンの長男ダーラー・シュコーと存在一性論について、書簡のやり取りをしており、1645年6月にアッラーハーバードの長官に就任したダーラー・シュコーは、在職中に現地を訪れてはいないものの、同地の長官に任ぜられた最大の意義として、イラーハーバーディーとの交流を挙げている［Rizvi 1983b: 139］。

しかし、実りある活動の一方で、イラーハーバーディーはイブン・アラビー学派の教義に反対する勢力との論争にも巻き込まれている。ここでは、その代表的な事例を二つ述べたい。まずひとつは、同時代のウラマーからの反発である。たとえば、イラーハーバーディーの没後ではあるものの、1664年2月に、アッラーハーバードのウラマーたちは、イラーハーバーディーの見解を異端とみなして、ファトワーを発している［Rizvi 1983b: 98］。この際、シャイフ・ムハンマド・ラシード・ウスマーニー・ビン・ムハンマド・ムスタファー（Shaykh Muḥammad Rashīd ‘Uthmānī bin Muḥammad Muṣṭafā, b. 1592）が、イラーハーバーディーの言説は神秘的であるものの反イスラーム的ではないと主張した、という［Rizvi 1983b: 98］。また、もうひとつは、当時シャー・ジャハーンの庇護を受けていた、自然科学者で哲学者、かつ論理学者であったムッラー・マフムード・ジャ

10）なお、このことを裏付ける同時代の史料は見つかっていない［Ali 1973: 243］。

11）存在一性論が南アジアに紹介されて間もない15世紀において、存在一性論とヒンドゥー神秘主義の同質性について執筆した代表的なスーフィー、Abd al-Quddūs Gangohī（d.1537/1538）の孫にあたる人物である［Schimmel 1975: 357; Rizvi 1983a: 335–342; 1983b: 267–268］。

12）しかし、イラーハーバーディーが「いつ・誰のもとで・どういう経緯で」イブン・アラビーの著作群を読んだのかについては、管見のかぎり、不明である。ただし、アッラーハーバードでの活動開始前には、『叡智の台座』の注釈を執筆していたとされる［Rizvi 1983b: 269］。そして、本論で後述するとおり、著作群の内容とそれらが執筆された年代から、『マッカ啓示』は修行を終えたイラーハーバーディーがアッラーハーバードに帰還したのちに読まれたと思われる。

13）イラーハーバーディーには多くの弟子がいたとされる。その一部として、Shaykh Tāj al-Dīn, Qāḍī Ṣadr al-Dīn, Shaykh Muḥammadī Fayyāḍ, Qāḍī ‘Abd al-Rashīd, Shaykh Aḥmad, Syyid Muḥammad Qannaujī, Qāḍī Yūsuf が挙げられる［Jafari 2009: 197］。

ウンプーリーとの存在一性論をめぐる論争である。書簡での議論のなかで、イラーハーバーディーは、ジャウンプーリーに対して自説を展開しつつ、同時にまた、神の知識の深奥は理性による理解を超えたものであると主張している［Rizvi 1983b: 269］[14)]。

イラーハーバーディーは多数の著作を執筆したのち、1648年7月20日、アッラーハーバードで死亡したとされる。その死後の逸話として代表的なものに、イラーハーバーディーの著作をめぐるアウラングゼーブとイラーハーバーディーの弟子のひとり、シャイフ・ムハンマディー・ファイヤーズ（Shaykh Muḥammadī Fayyāḍ, d.1695）との間での問答が挙げられる。その内容は、アウラングゼーブがシャイフ・ムハンマディー・ファイヤーズに、異端的表現が多く見られるイラーハーバーディーの主著『等価（*al-Taswiya*）』の内容について弁解するか、もしくは著作を破棄するかを迫ったというものである［Rizvi 1983b: 270–271］。

なお、イラーハーバーディーの著作に対しては、彼の死後長きに渡り、ハージャ・フルド（Khwāja Khurd, d.1663）などの著名なイブン・アラビー学派の人びとによって、注釈が書かれている［Chittick 1992: 232; Nair 2021: 118］。

III-2. イラーハーバーディーの著作

まず、イラーハーバーディー著作の全体的な特徴について、簡潔に述べたい。チティックによれば、イラーハーバーディーは明瞭な文体で多くの著作を記し、また、その執筆においては、イブン・アラビー思想を選良たちのものとして、一般のスーフィズムと区別していたとされる［Chittick 1992: 233–234］。加えて、特筆すべき点としては、イラーハーバーディーがペルシア語で執筆した自身の著作をアラビア語に翻訳したり、アラビア語著作についての注釈をペルシア語で記したりしていたことが挙げられる。例えば、イラーハーバーディーは、イブン・アラビーの『マッカ啓示』について論じた『選良たちの崇拝行為（*'Ibādāt al-Khawāṣṣ*）』をまずペルシア語で執筆し、のちにアラビア語に翻訳している［Rizvi 1983b: 270; Chittick 1992: 235］。さらに、イラーハーバーディーは、後述のとおり、彼の代表作である『等価』をアラビア語ではじめに執筆し、のちにその注釈をペルシア語で執筆している［Nair 2017: 670］[15)]。

次に、彼の著作の出版状況について述べたい。いくつかの著作は校訂を経て、刊本として出版されているものの、今日においても、イラーハーバーディーの著作のほとんどが未刊行の写本の状態で残っている。なお、イラーハーバーディー著作の目録を以下に掲載する。この目録は、［Ali 1973: 243–245; Chittick 1992: 234–236; Ansari 2006: 22–33; Lipton 2009b: 19; Jafari 2009: 198–199］、そして現在もアッラーハーバードに存在するイラーハーバーディー・ハーンカーのウェブサイト[16)]にしたがって、まとめている。

【イラーハーバーディーの著作目録】

1. 書名：*Anfās al-Khawāṣṣ*（『選良たちの息吹』）

14）チティックは、イラーハーバーディーの著作ではイブン・アラビーの教義の認知的側面が重視されており、このことは同時代の一部のスーフィーたちに見られた、神智はすべて味得（dhawq）によるものとする傾向に反していたと述べている［Chittick 1992: 233］。しかし、イラーハーバーディー自身も味得（dhawq）を重視していたと考えられる記述を彼の著作内に確認することができる。

15）このことから、イラーハーバーディーは、両言語を用いることで多くの読者に彼の著作を読んでもらい、その著作を通じて、存在一性論を広く知らしめようとしていたと見なせる。

16）Qutub-e-Allahabad. "Introductory article about Shah Muhibbullah Allahabadi," Khanqah Hazrat Shah Muhibbullah Allahabadi. <https://qutubeallahabad.blogspot.com/2015/04/hazrat-shaikh-muhibbullah-allahabadi.html>（2022年6月29日閲覧）.

執筆年：不明
言語：アラビア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh[17)]
Hyderabad, The Andhra Pradesh State Oriental Manuscripts Library, Kalām: 1689[18)]
London, India Office: 1279
Patna, The Khudabaksh Library, Arabic: 1284
Rampur, Raza Library: 2566
内容：『叡智の台座』の要約・釈義。

2. 書名：*'Aqā'id al-Khawāṣṣ* (*Daqā'iq al-'Urafā'*)（『選良たちの信条』（『霊知の妙』））
執筆年：1047/1637 年
言語：アラビア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh
Hyderabad, The Salar Jang Museum: 26/1（欠損箇所あり）
London, India Office, 1392
内容：必然存在やその属性、預言者性などについての説明。

3. 書名：*Ghāyat al-Ghāwāt*（『究極なるものの中で最も究極なるもの』）
執筆年：不明
言語：ペルシア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh
Aligarh, Maulana Azad Library, Subhanullah Collection 297 7/34
London, India Office
内容：世界と人間の創成、など 5 つの主題についての説明。

4. 書名：*Haft aḥkām*（『七つの諸規則』）
執筆年：1053/1643 年
言語：ペルシア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh
London, India Office, Delhi Persian Collection: 1024
Lucknow, Nadwat al-Ulamā: 20
内容：イブン・アラビー『マッカ啓示』における叡智についての記述に関する注釈
※　刊本あり[19)]。

5. 書名：*Ḥāshiya Tarjama al-Qur'ān*（『「クルアーン釈義」補遺』）
執筆年：不明

17）イラーハーバーディー・ハーンカー所蔵の写本は、写本番号が割り当てられていない。
18）同図書館の蔵書目録では、Kalām: 1588 も "*Anfās al-Khawāṣṣ*" となっているが、チティックが確認したところ、別著作だったとのことである［Chittick 1992: 234］。
19）Mohibbullah Allahabadi, *Risaleh Haft Ahkam*, ed. H. M. T. Ali (Aligarh: Institute of Persian Research, Aligarh Muslim University, 2008). 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科アジア専攻図書室に所蔵あり。

言語：アラビア語
写本情報：London, India Office: 番号未確認
内容：17. *Tarjama al-Kitāb* の注釈。なお、リプトンは本書と 20. *Ḥāshiya al-marātib al-arba'a* を別の著作としているものの［Lipton 2009b: 19］、*Tarjama al-Kitāb* の別名が *al-marātib al-arba'a* であることを考慮すると、本書と 20. *Ḥāshiya al-marātib al-arba'a* は同一著作だと推定される。

6. 書名：*'Ibādat al-Khawāṣṣ*（『選良たちの崇拝行為』）
執筆年：1051/1641 年から書き始めて、1053/1643 年に完了
言語：ペルシア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh
Aligarh, Maulana Azad Library, FT: 193
Kolkata, The Asiatic Society: 1125/1713
London, India Office: 1002
内容：イブン・アラビー『マッカ啓示』の翻訳・注釈

7. 書名：*al-Kitāb al-Mubīn*（『明瞭なる書物』）
執筆年：不明
言語：不明
写本情報：Rampur, Raza Library: 番号未確認
内容：存在一性論について。詳細不明。

8. 書名：*Maktūbāt-i Shaykh Muḥibb Allāh*（『イラーハーバーディー師の書簡集』）
執筆年：不明
言語：ペルシア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh
Aligarh, Maulana Azad Library: 297 7/37（ジャウンプーリーとの書簡。目録上の執筆者名はイラーハーバーディーではないものの、彼の書簡と同定される。）
Hyderabad, The Andhra Pradesh State Oriental Manuscripts Library: 1734/2
London, India Office, Delhi Persian Collection: 番号未確認（ジャウンプーリーとの書簡。目録上の執筆者名は、イラーハーバーディーではないものの、彼の書簡と同定される。Aligarh, Maulana Azad Library と同じ系統の写本と推定される。）
New Delhi, The Institute of Islamic Studies: 2141
内容：イラーハーバーディーの書簡は、現在までに 18 通が確認されている。
※　刊本あり[20]。

9. 書名：*Manāẓir-i Akhaṣṣ al-Khawāṣṣ*（『選良たちの中の選良の眺め』）
執筆年：1050. Ramazan 13. / 1640. December. 27.（執筆完了日）

20）Muhibbullah Allahabadi, *Maktubat-e Muhibullah Shah Allahabadi*, ed. A. A. Ahan (New Delhi: Roseword Books, 2018). 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科アジア専攻図書室に所蔵あり。

言語：ペルシア語

写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh

Aligarh, Maulana Azad Library, Shaifta collection: 55/60, 75/98

London, India Office, Delhi Persian Collection: 1113

Lucknow, Nadwat al-Ulamā: 997 [21)]

Rampur, Raza Library, Suluk Persian: 632

内容：イブン・アラビーの著作についての概要。イラーハーバーディー自身の生涯についての記述あり。

※　刊本あり [22)]。

10. 書名：*Maghāliṭ al-ʻĀmma*（『凡庸の偽り』）

執筆年：不明

言語：ペルシア語

写本情報：London, India Office: 1395

Rampur, Raza Library: 番号未確認

内容：神秘主義に関する誤解について

11. 書名：*Sih Rukn* (*Awrād-i Muḥibbī*)（『三つの柱』（『愛する者の讃歌』））

執筆年：不明

言語：ペルシア語

写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh

London, India Office, Delhi Persian Collection: 番号未確認

内容：存在一性論の信奉者の 3 つの規則について。

12. 書名：*Sirr al-Khawāṣṣ*（『選良たちの秘奥』）

執筆年：不明

言語：不明

写本情報：不明

内容：不明

13. 書名：*Sharḥ-i Fuṣūṣ al-Ḥikam* (*Tajalliyāt al-Fuṣūṣ* [23)])（『「叡智の台座」注釈』（『台座の顕現』））

執筆年：不明（ただし、アッラーハーバードに帰還する 1628 年以前に執筆されたはず）

言語：アラビア語

写本情報：Aligarh, Maulana Azad Library 3/562

内容：イブン・アラビー『叡智の台座』の注釈。

21）チティックは所在地を Lucknow, Nadwat al-Ulamā: 60 としている［Chittick 1992: 235］。

22）Muhibullah Ilahabadi, *Manazir-i-Akhass Al-Khawass*, ed. H. M. T. Ali (Santiniketan: Visva-Bharati Research Publications, 1993).

23）チティックは、この書名を *Taḥliya al-Fuṣūṣ*（『台座の飾り』）と記載している［Chittick 1992: 234］。

14. 書名：*Sharḥ-i Fuṣūṣ al-Ḥikam*（『「叡智の台座」注釈』）
執筆年：1041 年 /1631–1632 年
言語：ペルシア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh
Aligarh, Maulana Azad Library: 21/241
Hyderabad, The Andhra Pradesh State Oriental Manuscripts Library: 1485
Hyderabad, The Salar Jang Museum: Tas 102, 103
Lucknow, Nadwat al-Ulamā: 6/b
New Delhi, The Institute of Islamic Studies: 2026
Patna, The Khudabaksh Library: Acc 902.45
内容：イブン・アラビー『叡智の台座』の注釈。ただし、13. より多くの説明あり。
※　なお、イラーハーバーディーはこの著作を執筆した時点では、イブン・アラビーの『マッカ啓示』を読んでいなかったことを *Manāẓir-i Akhaṣṣ al-Khawāṣṣ* で述べており［Jafari 2009: 198］、1640 年に執筆された同著には『マッカ啓示』についての記述があることから、イラーハーバーディーが『マッカ啓示』を読んだのは、1631 年から 1640 年の間と推定される。

15. 書名：*Sharḥ-i Taswiya*（『「等価」注釈』）
執筆年：1047/1637–8 年から書き始めて、1050/1640–1 年に完了
言語：ペルシア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh
Aligarh, Maulana Azad Library, University Ḍamīma Taṣawwuf Fārsī: 42
内容：自身の『等価』についての注釈
※　刊本あり [24)]

16. 書名：*Ṭarīqa al-Khawāṣṣ*（『選良たちの道』）
執筆年：不明
言語：不明
写本情報：不明
内容：不明

17. 書名：*Tarjama al-Kitāb*（『クルアーン釈義』）
執筆年：不明（ただし、サドルプール滞在時に執筆されたとの説あり［Jafari 2009: 198］）
言語：アラビア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh
London, India Office: 1357
内容：クルアーンの釈義。別名は、*al-Marātib al-Arba'a*（『四つの階梯』）。

18. 書名：*Taswiya bayna al-Ifāda wa-l-Qabūl*（『付与と受容の間の等価』）

24）Muḥibb Allāh Ilāhābādī, *Sharḥ al-Taswiya bayna al-Ifāda wa-l-Qabūl: Risālat dar Waḥdat-i Wujūd-i Ibn-i ʿArabī*, ed. M. Moalem (Tehran: Intishārāt-i Mawlā, 2016). 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科アジア専攻図書室に所蔵あり。

執筆年：不明
言語：アラビア語
写本情報：Allahabad, Ilāhābādī Khānqāh
Aligarh, Maulana Azad Library: 43
Hyderabad, The Andhra Pradesh State Oriental Manuscripts Library: 766
Kolkata, The Asiatic Society, Curzon Collection: 番号未確認
London, India Office Library, Delhi Persian Collection: 1167b（ペルシア語訳含め、6つの写本あり）
New Delhi, The Institute of Islamic Studies: 2403
Patna, The Khudabaksh Library: 3861, 4319
内容：本論後半で詳述。
※［Lipton 2009b］にアラビア語原文翻刻ならびに英訳あり。［Nair 2021］に英訳あり。また、ウルドゥー語訳（訳者は "Aḥmad Ṣābirī" と記載されている。）の冊子がイラーハーバーディー・ハーンカーで配布されている。京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科アジア専攻図書室に所蔵あり。

19. 書名：*Wujūd-i Muṭlaq*（『無限定の存在』）
執筆年：不明
言語：ペルシア語
写本情報：Hyderabad, The Andhra Pradesh State Oriental Manuscripts Library: 1734/1
New Delhi, The Institute of Islamic Studies: 2140
内容：書名について、スィムナーニーのイブン・アラビーへの批判を参照しつつ、解説している。『叡智の台座』および『マッカ啓示』からの引用多数。

20. 書名：(*Ḥāshiya al-Marātib al-Arba'a*)（『「四つの階梯」補遺』）
※　上述の理由により省略。

また、下記の著作は、マウラヴィー・ムヒッブッラー・ビハーリー（Mawlawī Muḥibb Allāh Bihārī）という高名な論理学者の手によるものとされているが、チティックは、次の2点の理由で、この著作の著者はイラーハーバーディーであるとしている。第一の理由は、ビハーリーの他の著作にはスーフィズムに関する内容がいっさい見られないことであり、第二の理由は、この著作の長さと文体において、イラーハーバーディーの特徴がみられることである。

21. 書名：*Sharḥ-i Futūḥāt*（『「マッカ啓示」注釈』）
執筆年：不明
言語：ペルシア語
写本情報：Hyderabad, The Andhra Pradesh State Oriental Manuscripts Library, 1461J（第2巻のみ）
内容：「マッカ啓示」の注釈。

そして、下記はイラーハーバーディー・ハーンカーのウェブサイトに記載されている、上述以外

のイラーハーバーディーの著作である。22. のみ、ハーンカーに所蔵があるとされる。なお、26. については、上述した5. および20. と同一の著作だと思われる。そして、27. はウェブサイトにおける内容説明および［Jafari 2009: 197］から、イラーハーバーディーの弟子 Qāḍī Yūsuf の著作ではないかと考えられる。

22. *Risālah-ye Sair-e Ilāhī*（『神の過程についての論攷』）
23. *Risālah-ye I'ānat al-Ikhwān*（『同胞の手助けについての論攷』）
24. *Risālah-ye Tawḥīd*（『神の唯一性についての論攷』）
25. *Imāla al-Qulūb*（『心の性向』）
26. *Ḥāshiya-e Tarjamat al-Kitāb*（『「クルアーン釈義」補遺』）
27. *As'ila wa Ajwiba* [25]（『問答』）

IV. イラーハーバーディーに関する先行研究

本章では、イラーハーバーディーに関する代表的な先行研究を紹介する。

IV-1. イラーハーバーディー研究の歴史

まず、イラーハーバーディーについての研究史を簡単に確認しておきたい。20世紀初頭から半ばにかけては、イラーハーバーディーへの注目はほとんどなく、16–17世紀インド亜大陸を代表するスーフィーとしては、彼の同時代人であるスィルヒンディーが南アジアについての歴史家や神秘思想研究者に取り上げられていた。その主な理由は、リプトンによれば、20世紀において、イブン・アラビーの存在一性論を汎神論として蔑視するイデオロギーが南アジアで起こり、そのような研究態度をもった歴史家や思想研究者が中心となって、スィルヒンディーこそが存在一性論という汎神論的思想から“正しい”イスラームを擁護した Mujaddid-i Alf-i Thānī（「ヒジュラ第二千年期の改革者」）であるとして、イブン・アラビーと対比させながら、彼を過大に評価したためだという［Lipton 2009b: 8–11］[26]。そして、その結果として、南アジアのイブン・アラビー学派は不当な評価をされるとともに、同時代人のスィルヒンディーの陰に隠れる形となったことで、イラーハーバーディーと彼の思想はほとんど注目されなかった。

しかし、20世紀半ばから上記のような「イブン・アラビー vs. スィルヒンディー」の構図が見直されはじめる。その大きな理由としては、スィルヒンディーの研究が進むなかで、彼が著作のなかで、イブン・アラビーの思想を評価していたことが発見されたことが挙げられる［Friedman 1966: 64–65］。つまり、そのような発見を受けて、スィルヒンディーを南アジアの思想史において位置づけるにあたり、従来見なされていたような反・存在一性論者としての目証一性論者ではなく、存在一性論をより発展させるために異なる視点から論述をおこなった思想家、という見方が適切だと考えられるようになったのである。そして、スィルヒンディーが特定のイデオロギーから解放され、彼への過度な注目が弱まったことにより、スィルヒンディーと同時代の16–17世紀において、スーフィズムや存在一性論について多数の著作を執筆したイラーハーバーディーが注目されるようになる。また、イラーハーバーディーの研究が進むにつれて、先述したように、イラーハーバー

25）この書籍のウルドゥー語訳（訳者は上記同様、アフマド・サービリー氏）の冊子もイラーハーバーディー・ハーンカーで配布されている。京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科アジア専攻図書室に所蔵あり。

26）このような見方の代表的な研究者として、リプトンはファズルッ・ラフマーン（Fazlur Rahman）やアブール・カラーム・アーザード（Abū al-Kalām Āzād）の名を挙げている［Lipton 2009b: 9, 11］。

ディーがイブン・アラビーの『叡智の台座』や『マッカ啓示』から直接の思想的影響を受けていたことや、16–17 世紀ムガル帝国における存在一性論の最大の理解者と目されていたことが判明して、それらがさらなる注目を集める要因となった。しかし、このようにしてイラーハーバーディーの重要性を指摘する研究者が出てきたものの、この時代においては依然として概説的な研究がなされたのみであり、彼の著作の内容を論ずる研究者はほぼいなかった。

ところが、21 世紀に入ってからは、イラーハーバーディーの著作およびそれらについての注釈や反論までも含めて研究されるようになる。そのような研究においては、イラーハーバーディーの著作の内容が分析されるなかで、彼がその神秘思想において過去のイスラーム神秘主義の伝統を引き継いでいるという点や、同時代かつそれまでの様々な思想的立場の学者やスーフィーの学説を議論している点が重要視されている［Lipton 2009b: 2; Nair 2021: 111］。すなわち、イラーハーバーディー研究を通じて、「存在一性論 vs. 目証一性論」にとどまらない、大きな思想史的ダイナミズム（時代的／地域的）を把握することが目指されており、その目的に資するという点でイラーハーバーディーの思想的重要性が強く意識されている、というのが今日の状況である。

IV-2. イラーハーバーディーの主著『等価（*al-Taswiya*）』について

次に、イラーハーバーディーの思想を研究するにあたり、最も参照されている彼の主著『等価（*al-Taswiya*）』について説明したい。『等価』はその正式名称を『付与と受容の間の等価（*al-Taswiya bayna al-Ifāda wa-l-Qabūl*）』[27] といい、アラビア語で執筆された書物である。同著はイラーハーバーディーの著作の中でもっとも論争的な書物とされており、その内容は、同時代までの他の思想を論駁したり、存在一性論に対する反論への再反論をしたりしながら、彼独自の方法で存在一性論を擁護するものである[28]。たとえば、リプトンはその内容を冒頭から順番に下記 14 点の議題に分類している［Lipton 2009b: 52–66］。

1. 合理主義者たちと必然存在についての彼らの誤り
2. すべての可能態として存在しているものは実体を有しており、それが存在のもととなっている
3. 実体の根源は純粋存在である
4. アシュアリー学派の神学者とソフィストたちの誤り
5. 事物の本質は純粋存在である
6. ジブリールはムハンマドの内に存在した[29]
7. 受容者は存在する
8. 神こそが真の発出するものである
9. 存在の付与者は、受容者に与えられた存在以外の固有の存在を有している
10. 必然存在の存在は、原因であるとともに結果である
11. 必然存在は存在の付与者であり、その存在によって特別な権限を与えられるものではない

27）題名の邦訳についてはまだ定訳がなく、上記の題名も拙訳である。

28）なお、リプトンによれば、『等価』での存在一性論の擁護はイブン・アラビーの議論にしたがうが、イブン・アラビー学派で一般的だったいくつかの用語（たとえば、wujūd（存在））が使われず、その代わりに al-ifāda や al-qabūl といったイブン・スィーナーの用語が使用されているという点に大きな意義があるという［Lipton 2009b: 51］。この点については本論で後述する。

29）このテーマは、イラーハーバーディーの最も独創的かつ論争を呼んだ論点とされる［Lipton 2009b: 59］。

12. 付与者と受容者は等価である
13. 真実在であるアッラーの内に／から、すべての事物が顕現する
14. クルアーンの引用による終わりの言葉

それでは、『等価』はいかなる点において、南アジアのイブン・アラビー学派を理解する際に重要となるのであろうか。この問題についての回答は、上述のイラーハーバーディー研究の紆余曲折と同様に、時代によって強調される点が異なることに注意したい。まず、史実に照らして中立的に言える点としては下記2点が挙げられる。ひとつは、イラーハーバーディーの代表作と見なされている点である。たとえば、ナイルによれば、『等価』については、現在までに確認された限り、少なくとも合計16点の注釈および反論が執筆されており［Nair 2021: 108, 112］、このことから『等価』はイラーハーバーディーの著作のなかで最も広範な関心を呼び寄せたものだったとされる。また、もう一点としては、『等価』には存在一性論について学ぶための書物という側面があったと考えられることである。たとえば、『等価』の原文であるアラビア語で読めない読者に向けて、ペルシア語の注釈が後年にハージャ・フルドによって執筆されていたり［Rizvi 1983b: 17］、イラーハーバーディー自身も自らペルシア語翻訳と注釈を執筆していたりすることは［Chittick 1992: 236］、『等価』にこのような側面があったことを支持している。

そして、イラーハーバーディーの著作内容の研究が進んでいなかった時代には、イラーハーバーディーやその代表作『等価』については、対・目証一性論としての側面が強調された［Lipton 2009b: 24; Nair 2017: 677］。たしかに、先に述べたように、『等価』において、イラーハーバーディーは存在一性論を熱心に擁護しており、『等価』は彼の著作群でもっとも論争を呼び起こしたものだった。しかし、そもそもイラーハーバーディー自身が存在一性論を擁護したのは、スィルヒンディーに対してでも目証一性論者に対してでもなく、『等価』内で言及されている思想的立場や『等価』への反論を執筆したムッラー・マフムード・ジャウンプーリーに対してである[30]。また、『等価』をめぐる議論のなかで、スィルヒンディーの名前が初めて登場するのは、チシュティー教団の著名な聖者であるシャー・カリームッラー・ジャハーナーバーディー（Kalīm Allāh Jahānābādī, d.1729）によって書かれた『等価』に対する注釈においてである［Nair 2017: 689, n. 113］[31]。よって、「存在一性論 vs. 目証一性論」という偏見に基づいてイラーハーバーディーの研究をおこなうと、イラーハーバーディーの思想史的な重要性が矮小化されてしまう恐れがある。

最近では、このあと詳しくみるように、『等価』は南アジア・イスラーム神秘思想についての大きな思想史的ダイナミズム（時代的／地域的）を描き出す際に、重要な書物であるとされている。たとえば、リプトンは『等価』においてイブン・スィーナーの用語が使用されていることから、『等価』ひいてはイラーハーバーディーの思想の研究を通じて、イブン・スィーナーから始まる新プラトン主義的なイスラーム神秘思想の展開を見てとれる、と主張する［Lipton 2010: 477］。その一方、リプトン同様にイラーハーバーディー研究の代表者と目されるナイルは、『等価』において同時代までの様々な思想的立場にイラーハーバーディーが言及しているため、『等価』およびイラーハーバーディー研究を通じて、前近代南アジアにおける様々な思想的立場の関係性を把握できることを強調している［Nair 2017: 658–659］。それでは、次節において、両者による『等価』についての先行研

30）ムッラー・マフムード・ジャウンプーリーは、『等価』への反論として、『信仰の砦（Ḥirz al-Īmān）』という著作を執筆している［Nair 2016: 663］。

31）そのなかでは、スィルヒンディーの「存在一性論は神秘主義において初歩的なものにすぎない」という見解が論駁されている［Rizvi 1983b: 271］。

究を見ていこう。

IV-3.『等価（*al-Taswiya*）』についての代表的先行研究

前節で述べた通り、『等価』についての代表的な研究者としては、リプトンとナイルの名が挙げられる。なお、この二人は見解が一致しない点も多く、特に後者が前者を批判する箇所もあるものの、両者は今のところ直接的な論争をしているわけではない、といえる。むしろ、両者がイラーハーバーディー研究を通じて志向するものは、上記のとおり共通していると理解できる。それでは、さっそく両者の議論を個別に見ていきたい。

まず取り上げるのは、リプトンの議論である。リプトンが主張するのは、『等価』で使用されている語彙を分析することで、これまで指摘されてこなかったイブン・スィーナー、イブン・アラビー、イラーハーバーディーというイスラーム神秘思想の時系列的な発展が見えるということである。そして、その発展の流れを把握することで、上記三者の思想内容を「イスラーム神秘思想における新プラトン主義」というひとつの文脈上に再構成できることも主張する。その議論の流れを簡潔に述べると以下のとおりである。

まず、リプトンは『等価』を読むにあたり、それまでに強調されてきた「存在一性論 vs. 目証一性論」という図式を強調する見方をとらない。そのうえで、『等価』において使用される用語に注目すると、イブン・スィーナーとイブン・アラビーが共通して使用していた用語が目立つことを指摘する。使用語句に基づいて、イブン・スィーナーやイブン・アラビー、そしてイラーハーバーディーの思想を読み直すと、その三者には共通するもの（イスラーム神秘思想の新プラトン主義的な側面）を見てとることができると言うのだ。そして、その共通性を考慮すると、今まであまり注目されてこなかったイスラーム神秘思想の新プラトン主義的側面が明らかになるため、『等価』がイブン・アラビー学派の思想的展開を把握しなおすきっかけとして、重要であることを主張する。以上がリプトンの議論である。

次に、ナイルの議論を見ていこう。ナイルが強調するのは、『等価』ではイラーハーバーディーと同時代およびそれまでにおける、存在一性論の言説（その内部における細かい差異や論争点も含めて）ならびに存在一性論と敵対するような思想の代表的な言説が記載されていることから、『等価』の分析を通じて、前近代南アジアにおける存在一性論およびそれに対する各思想（イスラーム哲学やイスラーム法学なども含む）の関係をより詳細に解明できるはずだ、という点である。その議論の流れを簡潔に述べると以下のとおりである。

まず、『等価』を読むにあたり、ナイルもリプトン同様に、従来の「存在一性論 vs. 目証一性論」という図式に基づいた理解をしないように努める。むしろ、『等価』内で様々な思想に言及がおよぶこと、そして、イラーハーバーディーが同時代までの様々な思想を把握していたことを考慮すると、『等価』を読む際には、同時代およびそれ以前の様々な思想（その内容・立場）を把握しておかなければ、『等価』でイラーハーバーディーが論じたことを十分に理解できないという点を強く述べる[32]。そのうえで、同時代までの様々な思想の内容を正確に理解して『等価』を読むならば、『等価』に述べられたイラーハーバーディーの思想を正確に読み取ることができるとともに、前近代南アジアにおける存在一性論がその他のイスラーム思想とどの程度の親和／敵対関係にあったのかを

32）そのため、イブン・スィーナーとイブン・アラビーのみに注目して、彼らからイラーハーバーディーまでの間の時代のイスラーム思想の議論を踏まえず、また『等価』に付された多くの注釈を参照していないリプトンは、イラーハーバーディーならびに『等価』の重要性を正確にとらえきれておらず、また、リプトンによる『等価』の英訳では不適切な訳がある、とナイルは指摘する［Nair 2021: 113］。

把握することができると主張する。以上がナイルの議論である。

V. おわりに

本稿では、16–17世紀南アジアにおけるイブン・アラビー学派の重要人物であるイラーハーバーディーの生涯と著作、そして彼についての先行研究を概観してきた。本稿内で記述したとおり、イラーハーバーディーはムガル帝国期において、存在一性論者として代表的な地位にあったものの、著作のほとんどが未だに公刊されず写本にとどめ置かれていることや20世紀初頭のナショナリズムに基づいた矮小化のために、今日に至るまで十分な研究がなされていない。また、数少ない先行研究から言えることとしては、イラーハーバーディーをどう理解するかは、「イラーハーバーディーとその著作をどのような思想的文脈において理解するべきと考えているのか」「その理解を通じて、何を主張したいのか」[33] ということと不可分である、ということだ。しかし、イラーハーバーディーの著作を読む場合に、どのような思想的文脈を意識するかということは、16–17世紀ムガル帝国において展開されていた、それまでのイスラーム神秘思想についての系譜および同時代やそれまでの思想家間の議論に関する幅広い知識をおさえてはじめて考えることができる。すなわち、イラーハーバーディー研究においては、個々のテキストの読解と思想史的文脈の考察を同時かつ相乗的におこなっていくことが必要である、と言えよう。

本稿を締めくくるにあたり、イラーハーバーディー研究の意義を再度強調しておきたい。本論の冒頭で指摘したとおり、南アジアのイブン・アラビー学派研究においては、概説的な先行研究があるにも関わらず、個々の思想家の著作内容の解明は不十分、という背景がある。イラーハーバーディーの著作で述べられている存在一性論的学説を分析して、そこで用いられている用語や理論を解明することで、16–17世紀南アジアにおけるイブン・アラビー学派の実態を明らかにすることができる。とりわけ、イラーハーバーディーは本稿で触れた先行研究で述べられているとおり、従来のイスラーム思想の様々な見解についての知識を有し、それらを紹介しつつ、論駁するかたちで自説を展開するとともに、同時代の著名な哲学者ムッラー・マフムード・ジャウンプーリーと存在一性論をめぐって討論したり、ダーラー・シュコーに存在一性論を解説したりするなど、それまでの知的伝統と同時代の知的活動におけるハブ的存在である。よって、彼の思想の解明を通じて、前近代南アジアにおけるイブン・アラビー学派の思想営為の諸相がより明らかになることが期待できる。

VI. 参考文献

VI-1. 南アジア、特にムガル朝のイブン・アラビー学派に関する先行研究リスト

東長靖・中西竜也（編）2010『イブン・アラビー学派文献目録』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター.

二宮文子 2010「59. ムヒッブラー・イラーハーバーディー」「62. ダーラー・シュコー」東長靖・中西竜也（編）『イブン・アラビー学派文献目録』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター.

Alam, M. 2011. “The Debate within: A Sufi Critique of Religious Law, *Tasawwuf* and Politics in Mughal India,” *South Asian History and Culture* 2(2), pp. 138–159.

Chittick, W. C. 1991. “Ibn ‘Arabī and His School,” in S. H. Nasr ed., *Islamic Spirituality:*

33）たとえば、イスラーム神秘思想の時代的な展開を明らかにする、同時代におけるイスラーム神秘思想／哲学の様々な見解を明らかにする、など。

Manifestations, New York: Crossroad, pp. 49–79.

———. 1992. “Notes on Ibn al-‘Arabī’s Influence in the Subcontinent,” *The Muslim World* 82(3), pp. 218–241.

———. 2005. *Ibn ‘Arabi: Heir to the Prophets*. Oxford: Oneworld Publications.

———. 2012. “Waḥdat al-Wujūd in India,” *Ishraq: Islamic Philosophy Yearbook* 3, pp. 29–40.

Ernst, C. W. and B. B. Lawrence. 2002. *Sufi Martyrs of Love: The Chishti Order in South Asia and Beyond*. New York: Pilgrave Macmillan.

Friedman, Y. 1966. *Shaykh Aḥmad Sirhindī: An Outline of His Thought and a Study of His Image in the Eyes of Posterity*. Montreal: McGill University.

Kugle, S. and C. Ernst. 2012. *Sufi Meditation and Contemplation: Timeless Wisdom from Mughal India*. New York: Omega Publications.

Nizami. M. A. 2017. *Reform and Renewal in South Asian Islam: The Chishti-Sabris in 18th–19th Century North India*. New Delhi: Oxford University Press.

Rizvi, S. A. A. 1983a. *A History of Sufism in India Volume One: Early Sufism and its History in India to 1600 A.D*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

———. 1983b. *A History of Sufism in India Volume Two: From Sixteenth Century to Modern Century.* New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Sabir, I. 2004. “Impact of Ibn ‘Arabi’s Mystical Thought on the Sufis of India during the Sixteenth Century,” in N. Misra ed., *Sufis and Sufism: Some Reflections*, New Delhi: Manohar Publishers & Distributors, pp.129–142.

Schimmel. A. 1975. *Mystical Dimensions of Islam*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press.

———. 1980. *Islam in the Indian Subcontinent*. Leiden, Köln: E. J. Brill.

VI-2. イラーハーバーディーに関する先行研究リスト

【書籍・論文】

Ali, H. M. T. 1973. “Shaikh Muhibbullah of Allahabad—Life and Times,” *Islamic Culture* 47(3), pp. 241–256.

Ansari, M. J. 2006. *Sufi Thought of Muhibbullah Allahabadi*. Aligarh: Aligarh Muslim University.

Jafari, A. Q. 2009. “Shaikh Muhibbullah Allāhābādī: His Life and Works,” in M. Rafique ed., *Development of Islamic Religion and Philosophy in India*, Delhi: Project of History of Indian Science, Philosophy and Culture. (History of Science, Philosophy and Culture in Indian Civilization. Vol. VII: The rise of New Polity and Life in Villages and Towns, 5), pp. 193–201.

Lipton, G. A. 2009a. “Muḥibb Allāh Ilāhābādī: South Asian Heir to Ibn ʿArabī,” *Journal of the Muhyiddin Ibn 'Arabi Society* 45, pp. 89–119.

———. 2009b. *“The Equivalence” (Al-Taswiya) of Muhibb Allah Ilahabadi: Avicennan Neoplatonism and the School of Ibn ‘Arabi in South Asia*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller.

———. 2010. “Muḥibb Allāh Ilāhābādī’s *Taswiya* Contextualized,” in D. Hermann and F. Speziale eds., *Muslim Cultures in the Indo-Iranian World during the Early-Modern and Modern Periods*, Berlin: Schwarz & Instutut Francais de Recherche en Iran, pp. 475–497.

Nair, S. 2017. “Muḥibb Allāh Ilāhābādī on Ontology: Debates Over the Nature of Being,” in J. Ganeri ed., *The Oxford Handbook of Indian Philosophy*, Oxford: Oxford University Press, pp. 657–692.

———. 2021. “A Mughal Treatise on Essence and Existence Muḥibb Allāh Ilāhābādī’s Equivalence between Giving and Receiving (al-Taswiya bayna al-Ifāda wa-l-Qabūl),” *Journal of Sufi Studies* 10, pp. 108–140.

Siddiqui, M. Z. 1981. “Shah Muhibb Alahh Ilahabadi and the Liberal Tradition in Islam,” *Proceedings of the Indian History Congress* 42, pp. 289–294.

【ウェブサイト】

Qutub-e-Allahabad. “Introductory article about Shah Muhibbullah Allahabadi” *Khanqah Hazrat Shah Muhibbullah Allahabadi*.<https://qutubeallahabad.blogspot.com/2015/04/hazrat-shaikh-muhibbullah-allahabadi.html>（2022年6月29日閲覧）

VI-3. 本論執筆にあたって上記以外に参照した著作

中畑正志 2007「VIII プラトン哲学・アリストテレス哲学の復興」内山勝利他（編）『哲学の歴史 第2巻 帝国と賢者』 中央公論新社.